

平成 30 年 10 月 30 日(火)

ライフル射撃における競技力向上について(中学校から高校 1 年次にかけての強化について)

西武学園文理中学・高等学校
塩旗園香

1 はじめに

「ライフル射撃」を部活動としているのは県内に3校(栄北高校・国際学院高校・西武学園文理高校)

ライフル射撃の高校生種目:エアライフル(AR)・ビームライフル(BR)・ビームピストル(BP)

エアライフル:世界競技。公安公認の免許制(ビームライフルで一定の段・級を取るなど資格が必要)。

ビームライフル・ビームピストル:普及競技。「エアライフル」競技の免許を取るまで。

●H30 全国大会成績(ピストル種目はない):

エアライフル少年男子団体:優勝 エアライフル女子団体:3 位

ビームライフル男子団体:7 位 ビームライフル女子団体:準優勝

エアライフル少年男子個人:3・4・6 位 エアライフル女子個人:8 位

ビームライフル男子個人:優勝 ビームライフル女子個人:優勝

●H30 国民体育大会:少年種目(6 種目)すべてで入賞(全員高校2・3年生)

→高校生 2・3 年生は概ね強化できている。そこで…

「中学生から高校 1 年次にかけての強化」が課題である。

2 現況での強化について

近年「中学生選手」が全国に 50 名前後で推移している。

(東京五輪を見据え、若年層の強化が行われていることも背景)

「全日本ジュニアビームライフル射撃競技選手権大会」(岐阜市・毎年 4 月 29 日前後に開催)参加者数

H28 年度 53 名(うち埼玉県の中学生選手 8 名(男 3・女 6))

H29 年度 52 名(うち埼玉県の中学生選手 10 名(男 6・女 4))

H30 年度 48 名(うち埼玉県の中学生選手 7 名(男 2・女 5))

→埼玉県でも毎年一定数の中学生選手が活動している。

①国際学院中学校射撃部

②西武学園文理高等学校ライフル射撃部

③栄北高等学校エアーライフル部※「ライフルスクール」(部活ではないが、「プラチナキッズ」から高校までの中学 3 年間の空白期間を埋めるため、設置して頂いている)

これらの生徒の強化が課題である。その必要性は【エアライフル競技の免許を取るのに時間がかかってしまうから。(早くて 3 ヶ月、遅いと半年)】

【ビームライフルで三段】が必要(高 1 から始めると半年ほどかかる)→エアライフルの免許を高 1 の新人戦までに取得できない→実質は高 2 からエアライフル競技→選手生命が短い

3 「中学から高校にかけての強化」アンケート

別紙

4 アンケートまとめ

小・中学生からの競技開始には高校からの競技開始と比べて競技力に関しどのようなメリットがあるか、顧問にアンケートをとった。(3校分)

《 アンケートE・Fまとめ 》

(直接的なメリットとして)

- ①技術的にアドバンテージがある
- ②早期にエアライフルの免許を取得できる
- ③大規模な大会に参加し、高校生の競技力に触れ、学ぶことで、以後の動機や向上心に結びつく

(間接的なメリットとして)

- ④本人の技術を見て、高校からの入部生が追いつこうと精進する
- ⑤保護者の理解と協力が得られやすい
- ⑥本人が部内でリーダーシップを取ることで責任感を養える

上記のようなコメントが得られた。

顧問たちはやはり、早期からの指導によって競技力の向上に期待できる場所があると見ていると考えてよいだろう。

5 全体まとめ

どこの学校でも、どんな部活動でも事情は同じかもしれないが、国際学院、文理とも中学時の部活動には様々な制限がある(活動時間、下校時間、学校行事、補習など)。栄北高校では、必ずしも自校に入学するとは限らない児童たちの指導も行っており、自己犠牲の精神がないと続かないことである。

しかし、アンケートからは、顧問たちの熱心な指導のもと、その情熱に答えて技術向上に精進している生徒の姿がうかがえる。それも中高の顧問が連携し、共通理解と愛情あつての成果と見受けられる。

今後も県内の顧問全員で協力し、若年層の選手獲得に努力し、埼玉のライフル射撃の強化に努めていきたい。

【栄北高校】プラチナキッズ生の競技カンケート

	A	B	C	D	E	F	G	
入学年度	プラチナキッズ(小学6年生)選手の数 (単位:名)	Aのうち、翌年4月から(中1から)栄北ライフルスクールを継続した選手の数 (単位:名)	Bのうち、栄北高校に入学し、エアライフル部で競技を(少なくとも高2の夏まで)継続した生徒(単位:名)	Cの生徒の実績(生徒名は記号でOK。性別はお書き下さい。中学生は全国小中学生大会、岐阜の全日本 Jr BR、JOCなど、高校生は関東大会以上でお書き下さい))	Dの生徒の現在の学年	プラチナから始めたことで、高校から射撃をはじめた選手と比較して「競技力向上」の点で特筆すべき相違点があったか?	「射撃部の活動を小学生のときからやっていたので、高校からはじめたよりよかった」こと	
1	平成24年度	2	2	1	A(女)高2:関東大会団体戦優勝メンバー、全関東選手権AR8位	高2	小中学生の時は陸上をメインに行い、基礎体力がしっかりしていた。そのため、据銃姿勢をつくるための基礎体力作りが必要なかった。また、中学生の時に月数回程練習を行い、射撃の基礎を築くことができた。	スポーツに対して理解度の高い保護者であり、射撃に対しても理解を得られやすかった。
2	平成27年度	2	2	B(女)中1:H30 全日本ジュニアチームBR団体2位、BR個人3位、H30 全日本小中学生チームBR個人6位、H29 全日本中学生AR個人6位、H28 全日本小学生BR個人3位	中2	タグラグビーなどの経験していたためか、身体能力が高く、練習回数が少なくても工夫して良い据銃姿勢がとれた。スポーツに対する理解力は非凡なものがある。また、高校生と比べても度胸がある。そのため、少ない練習でも多くの入賞を果たしている。	射撃の才能を保護者が理解し、小学生の時は熱心に練習に参加してもらえた。中学校ではソフトボール部に所属しており、現在では定期的に射撃の練習はできていない。高校で射撃を続けた場合は、日本を代表する射手となれる。	
				C(男)中2:H28 全日本小学生BP個人4位	中2	身体能力が高く、長距離に関しては非凡なものがある。ピストルを行っているため、その能力が生かしているかは分からない。しかし、逆に射撃で特殊能力を身につけるために行っている。	小中学校では陸上をメインでしており、現在は数ヶ月に1回程度の参加状況である。	

3	平成28年度	9	6	D(女)中1:全日本ジュニアチーム団体2位、全日本小中学生チームBR個人7位、H29全日本小学生BR個人5位	中1	棒高跳びなどで選抜されるぐらいの身体能力を持つ。また、練習熱心であり、度胸もある。そのため、基礎的能力をすぐに身につけることができ、大会で入賞を果たしている。	保護者が本人の射撃能力の高さを理解しており、射撃に対する理解度も高い。将来は全国大会で活躍できる逸材。
4	平成29年度	5		E(男)小6:H30全日本小中学生BP2位、全日本小中学生BR優勝	小6	近代三種を中心に励んでおり、ピストルの種類はことなるが、ピストル射撃に対する意欲は高い。ピストルを保持する能力が高く、少ない練習でも高得点が撃てる。	保護者の理解度は高い。しかし、近代三種の一種目として考えているため、より精密なライフル射撃では今後難しくなるはず。
				F(女)小6:H30全日本小中学生BR4位	小6	陸上をメインで行っており、身体能力は高い。そのため、据銃姿勢のをつくるのに短期間でできた。また、練習熱心であり、競技力の伸びも早い。	保護者のスポーツに対する理解度が高く、射撃に対する理解も得やすかった。今後は高校で陸上と射撃のどちらを行うかは検討中(国際学院へ進学予定)。
				G(男)小6:H30全日本小中学生BR5位	小6	引き金を引く能力が高く、体が大きくなれば高得点を撃てる。また、集中力が高く、練習熱心であり、静のスポーツで大成するはず。	保護者が射撃に対して熱心であり、理解を得られている。
				H(女)小6:H30全日本小学生BP優勝	小6	近代三種や陸上を行っている。走る能力が高く、反射神経も特にいい。そのため、引き金を引く能力は非凡なものがあり、ピストル向きの選手である。	保護者の理解度は高い。しかし、近代三種の一種目として考えているため、より精密なライフル射撃では今後難しくなるはず。
5	平成30年度	1		I(女)小5:H30全日本小学生BP6位	小5	まだ始めたばかりであり、特記事項はない。	保護者の理解度は高い。しかし、近代三種の一種目として考えているため、より精密なライフル射撃では今後難しくなるはず。